左千夫全集

第三卷

九鬼大全集

第三巻

岩波書店刊行

左千夫全集 第三巻　第三回配本（全八巻）
昭和五十二年二月十日　發行©

定價三〇〇〇圓

著者　伊藤左千夫
發行者　岩波雄二郎
發行所　〒101 東京都千代田區一ツ橋二ノ五ノ五
株式會社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六ノ二六二四〇

印刷・法令印刷　製本・三水舎

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目　次

陽　炎……三
姪　子……二五
奈々子……三五
深き感謝……五一
箸……六一
眞面目な妻……八三
白き印象……一六九
去　年……一七三
大雨の前日……一九七
水害雜錄……二〇三
古代之少女……二三三
細眞菰……二七九

提灯の繪をかく娘……二八九
女と男……三三一
三ヶ月湖遊記……三三一
雲……三四三
合歡木……三六三
守の家……三七一
弱い女……三七七
採蓮一節……三九七
落穂……三九九
可哀想だから……四一三
〔草稿〕
笑はぬ夫婦……四二一
醒……四二六
後記……四三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小說・紀行・小品　二

陽　炎

一

おかのは未だ三十二である。肉つきもよく色も黑い方ではないが、頸筋のあたり顎の下の邊に、僅かに女らしい皮膚の色が見える許り、被服の及ばぬ胸や顏やは、日の燒けきつた銅色である。野天の仕事をしてるからであるは云ふまでもない。

顏形に氣をつけるといふやうな事は幾年昔の夢か。光澤のない薄赤い髮の毛は、何時もきまつた櫛卷の引詰である。鬢もなければ髱もない。

おかのは今、自分一人しやがんで居れば、流元は半分暗くなるやうな、小さな流しで、鍋か釜かを手早に洗つて居る。

「しようのない兒だねい此兒は。今直ぐに終へるんだから、ぢつとしてゐろつたら。

背にゐる兒供にぎち〳〵喰はして、せつせと手を働かしてゐる。兒供は切なさうに斜めに母の背に乘つかつてる。頰を母の肩へつけて休んでるかと見ると、頸をそらし顏を起して、手に持つた赤いメンコを母の後襟りの邊

で、いたづらしてゐる。手も足も丸々と肥えた男の子である。顔半分鼻こばりに汚れ、繼ぎはぎの當つた着物を着てるが、どこか卑しくない處のある兒である。

おかのは幾許もない、朝食の洗物を大方にして漸く腰をのした。椀茶椀の類を布巾で拭いてると、先つきから流しへ降口の柱に身を持たせて、何か云はうとして云ひかねてゐた二郎は、

「お母さアん……。

母は暫くしてから、

「なんだよ。

と云つたなり見向きもしないで手を動してる。二郎は怖々した力のない目を母に投げて、默つてる。背中の兒は、メンコを弄びつゝしつこをした。流しの蹈板に、しつこの水が溜つてる。二郎はちらとそれを見たけれど、しつことも云はないで默つて立つてる。母も氣づかないで手を動かしてる。母は二郎を見向きもしないけれど、なか〳〵知らぬ振りをしてるのではない。

「月謝だらう。此の間さう云つて置いたぢやないか、未だ二十六日だもの。……えいからち事よ。

「だつて、きのふ先生がさう云つたゞもの。……

「だつてえいち事よ。未だ二十六日だから。……

「そんなら明日は屹度えいかいお母さん。……

二郎はかう云つて母の顔色を窺つてる。二郎は十二になるのだ。二郎は母のこめかみが、ぴくぴく動くのが氣

になる。二郎は兩親の困つてるのが解つてるから元氣がないのだ。母は仕事は濟んだけれども猶あたりに水を掛けらしなどして落ちつかないさまである。

「わからねえ兒だねい。早く學校へ往つたらえいぢやねいか。こん兒はほんとにやくに立たねい兒だよ。

二郎は詞返しもせず、淋しい顏をして柱から離れた。汚れ切つた風呂敷に教科書を包み、弟の多一を呼びたてゝ力なく學校へ出掛けた。

「ほんとにいやになつちまア、

と舌打したのは、火鉢の側に鏡を立てゝ髪を結つてた、長女のおときであつた。流場を立たうとした母は、其娘の詞を聞逃しはしなかつた。

二

早生れの十四になるおときは、もう兎角に髪を氣にしたり手足の汚れるのを氣にしたりするやうになつた。近所の者からからかひ半分に、「おときさんは美人だから。」など云はれると、一寸と歩くにも品振る風が見えるのだ。

突然思ひ出したやうに勝氣な事を云ふ。兩親に叱られると、ふいと出て終つて、どこを遊んでくるのか半日位歸らぬことがある。奉公をしろと云へば、「御膳炊なんか眞平ですよ。」など云つて、親の云ふ事を聞きさうにもしない。隣家の齒入屋の媼が、かういつたこともある。

「お隣のおかみさん、あなたんとこのおときさんは迚も瓦斯殼ふるひなどやりやしませんよ。おかのも餘所の者の噂でもするやうに、「どうせ育て損でさア。」と云つて居つた。

今朝も朝から一揉み揉み返したのである。おかのは臺所を片付けて、おぶつた兒供をおろし、濡れた着物を着せ替へやうとする。火鉢の側に腰を落して、

「ときちやん勘坊の着物を見ておくれ。

「あたし髪結つてるぢやねいか。

「いつまでそんな事してるんです。貧乏人がお作りなんぞして、どうなるかい。

「お作りだつてお母さん……へんをかしいや。何一つ人並みのことさしてくれもしないで。……

「能くまあそんなに一々親に返答が出來るこつたね。ほんとにえい料簡だよ。

「いくらでも返答しますわ。返答の出來ないやうにしてくれねんだもの。

「お父さんも可哀想だよ。こんな餓鬼を育てゝ。ほんとにいぢめられる爲に子供を育てたやうなもんだ。

「フンお母さんらえい氣だ。お父さんが可哀想だつて。……餘所のものがみんな笑つてるのも知らないで。ほんとにえい氣だい。外聞が惡くてなりやしねいや。四人の子の始末もつきかねてるのに又かつて云つてら。こんな家さ生れたものこそ、えい面の皮だ。

呆れて視張つた眼には涙も浮ばない。おかのは苦しいやうな恐しいやうな一種云ふに云はれない、厭な苦しさに總身の身震ひを覺えた。「これが十四にしかならない女の子の云ふことだらうか。」おかのはかう胸の中に繰返

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

して見て、覺えず我娘の横顔を見詰めたのである。おかのは憎々しい我娘のへらずロをたしなめる詞も出ないで、默つて終つた。はがゆく、もどかしく、我れと吾が胸を掻きむしりたい心持がする。勘坊を横かゝへにかゝへた手は震へが來ていつまでも止まない。おときも櫛箱を片づけ屑紙で油手を拭きながら、火鉢の向うへ坐つた。成程頭だけは天晴れな女が出來上つた。

おかのは娘が目の前に坐つてゐるのに、氣もつかぬかの如く、ぢいっと俯伏に自分の手を視つめて考へて居る。おかのは自分が田舍に育てられた十四五の頃の事を思ひ出した。少しも立派な暮しではなかつたけれど、さりとて何一つ不自由だと思つた事もなかつた。兩親には可愛がられ、兩親から六つかしい顔された事もなかつた。又兩親に叱られるやうな事もしなかつた。いつも春のやうな心持で面白かつた。それに比べると、今のおときなどの、洒落臭さ、厭らしさ憎々しさが、不思議でならない。さうして氣味が惡くて溜らない氣持がする。それもこれも、此石の上のくらしが惡いのだらう。長屋住の其日暮しが惡いのだらう。考へ違ひであつた。こんな所へくるのではなかつた。死んだ兩親に濟まない。そんな考へが先から先とはてしなく出てくる。おかのは俄に我身の情けなさを思ひ浮べて、熱い涙が眼に溜つた。

「お母さアん……お母さアん　あらお母さんどうしたの。

おときは自分の云つたことが、それほど母の氣に障つたとは知らないのだ。おかのは溜涙をぼろ〳〵と落とした。さうして其涙を拭かうともしない。身動きしもしない。只默つて居る。勘坊は口から乳房を離して眠つてゐる。家の中は氣の滅入るほど陰氣になつた。淋しくなつた。

一家庭一個人の淋しさや心細さとは、何の關係もないかの如く、世間は只騷々しい人力車荷馬車が引きゝりなしにがら〳〵する。自動車が通る。廣告行列が通る。

次々とはてしなく死ぬ人間を、片端から地下へ埋めつゝ平氣に進行し行く社會は、又一面に一家庭一個人の悲哀慘劇などは、寸毫の容赦も斟酌もなく、其のがやがやの騷の底に踏消し押消して通るのである。小家庭小個人の流轉の如きは蚤のはねる程にも人の注意を引かないのである。

現在我子で我が目の前にゐるおときにも、おかのが心細さは解らないのである。かうなるとおかのが心の中には、自分がおときの母であるといふ心持が、どこの隅にもない。これまで育てればもう安心だといふ樣な心持は遂に無くて終つた。

目の前に涙を垂れてる母の心持を解し得ぬおときは、自分の身がつまりどうなるかと云ふ事など無論考へやしない。それで母がいつまでも默つてるから退屈し出した。

「お母さんあたし奉公さして貰ひたいわ。

「なんなりとお前の好きに……。

「あたしもう髪いさんに賴んだの。

「さうかい、いつも〳〵親をさげしんでゐるお前のことだから、お前がどんな奉公しやうとわたしはかまはないけど、お前お父さんに相談したかい。

「だからお母さんからお父さんにさういつて貰ひたいわ。

「いやなこつた。自分の親だもの自分で話しするがえいぢやないか。

「お母さんてば、あたしばつか憎んでるのだよ。

おかのは又ぐつと腹にこたへた。おときは平生我儘のしどほしで、自分は云ひたいはうだいな事を云つてゐながら、何か少し角立つた話でも出ると、直ぐ母親を口でやりこめるやうなことをする。おかのは娘の口答へを泣いて腹立つことがあつても、むしり倒してやる程の氣もなく、口で云ひすくめてやる程に口も達者でないから、いつでも母娘は筋道も立たない喧嘩をして終ふ。

「ほんとにお前のやうな、おつかねい人はねいよ。親を何だと思つてるだらうか。さあと云へばこんな汚ない家だとか、こんな貧乏だとか、いやになつて終ふとか云つちや、親を馬鹿にしてる。こんな親がいやなら、お前一日も早く何所へでも行つてくれ。

「あらまるでお母さん話が違つてら。

「違つてやしないよ。そりやお父さんやお母さんに働きがねいに相違ないけど、お父さんやお母さんがわるくて許り貧乏してるのぢやないわ。兩親が二年續いてなくなつた處へ、お父さんが長の煩ひ、お父さんがやうやう働くやうになつたら、わたしが又半年も煩つたのだもの、どうして溜るものか。そこへお前や二郎が出來たゞもの、どうすることも出來ないぢやないか。

「そんなことあたし知らないわ。

「知らないなら猶聞いておくれ。只々親が意氣地がないからと思つてゝ、人許り羨しがる。少しだつて親のた

しにならうなどゝは思はない。

おかのは再び思ひ迫つて又聲がつまつた。さうして啜泣きをするのである。おときは洒々として母の泣顔を見下してゐる。さうして心の中では、さあと云ふとお父さんにひくからをかしいやなどゝ思つてるらしい。

勘坊が眼をさまし、うん〳〵と云ふ。「うんこがでるのかい。おゝさうか。」と云つて母は立つた。

三

瓦斯殼で黑く汚れた、一臺の箱車を引いて多吉は裏口から這入つてきた。

背の高い頰骨の出た目の細い男だ。小鬢には餘程白髮があるやうだが、バリカンで五厘刈に刈つてあるから目には立たない。笑顔に賑かな處があつて、頑丈な親父である。車は裏へ引入れて置いて、足油の染みた藁草履を行儀よく臺所口へ脫いだまゝ上りこむ。

「おい天氣は直つたし、場所も極つたから出掛けるんだよ。おゝ勘坊どうした。うんこやつたかさうか。えい兒になつたな。

おかのは夫の晴々した樣子に引立てられて、塞つた胸がいくらか透くのである。「おつちやがつこ、おつちやがつこ。」といふ勘坊を夫の手に渡して、炭團の火を搔きながら、

「萱の家さんであの明地を貸してくれましたか。

「ウン快く貸してくれた。あすこなら第一工場から近いし玆からも近いから、大變都合がえい。

「そりやまあよかつた。あそこだと餘程樂ですからね。それではどうせう、もう十時だが。

「さうだなア、それぢや一寸湯を沸すがえい。茶漬を掻込んでくことにせう。おゝ勘坊におみやがあつたつけ。父は袂から二本の卷煎餅を出して勘坊にやる。勘坊は喜んでおつちやおつちやと片言に父を呼ぶ。父はさもさも可愛さうに、目を無くして賑かな笑ひを顏に湛へて居る。

「勘坊を抱いてりや苦は忘れる。なア勘坊……

おかのは一寸とした着物を風呂敷に包み、自分は仕事着に着替へて出る仕度をする。家を明けて出るのだから、風呂敷包は隣へ預けるのだ。多吉は餘念なく勘坊を愛しながらも、先刻から、おときが浮かぬ顏して火箸をいぢつてるのに氣はついてゐる。

「とき早く湯を沸かせ、なぜぐづ〳〵してるんだ。

「あたしも瓦斯殼ふるふんですか。

「あたりまいよ、早く湯を沸せつたら。

おときは不承無精に立つた。立ちながらあア〳〵と云ひつゝ背伸をする。

「おときはねお前さん、こんな貧乏家に居るのは厭だから、奉公に出たいんだつて。此間は御膳炊きに出ろと云つたら、眞平だと云つた癖に、何でも髮いの婆さんに賴んださうですよ。どんな所へゆく氣か。

おかのはかう云ひつゝ夫の側へすわる。だまつて勘坊を自分の手に受取りながら、あの風を御覽なさいと云ひたさうに、おときの後姿に目を向けた。

「何か今日も朝から、せり合つたのか。奉公すると云ふなら奉公させるのさ。どうしたつてえいよ。どうせたしにする氣はねいから。

「だつてお前さんあれまで育てゝ置いて、なんのたしにもしない氣ですか。

「えいつち事よ。いくらたしにしようと思つたつて、たしになんねいものは仕様があるめい。おれは遠うからあきらめてゐる。

「そりやさうですけれど、あいつがあんまり憎らしいから、今朝なんかお前さんかういふんです。お母さんのやうに、兒供許りうんで外聞が惡いつて。十四にしかならないあの餓鬼がお前さんさう云ふんですよ。ほんとにおつかねい兒です。

「まアさう云ふなま。おれも知つてるから。かうして大ぜいの厄介をかゝへて、其日を送つてくだけで、おれの苦勞は荷に餘るのだ。此上餘計な氣揉みはちつとだつて出來ない。だから面白くもねい事はあんまり云ひこなしだ。

おかのはいつも夫から云はれてる事だから、ほんにさうだと、俄かに色を直して、「勘坊が一番可愛いのだよ。」と勘坊に頰擦りをするのである。

おときは兩親から散々厭なことを遠くから聞かせられ、ぶつちようづら丸出しに、だんまりこくつて湯の沸いた鐵瓶を持つてきた。さうして一通りの物を並べる。

「ときお前も一所にたべてさつさと仕度しろ。奉公するつたつてな。口のあるまでは働くんだ。遊んでて飯く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com